



## 壊血病とビタミンCの歴史—「権威主義」と「思いこみ」の科学史

英語版初版は1986年。著者はイギリス出身の栄養学者、栄養作家。元米カリフォルニア大学栄養学部教授。壊血病の歴史は有名であり、類書も多いが、最も史実に忠実に書かれた一書（ケニス・J・カーペンター 著、北村二郎・川上倫子 訳、北海道大学図書刊行会、1998年刊）

## 栄養健康情報氾濫の時代に、歴史に学ぶ

350頁あまり、小さな文字の縦書き2段組みで、本を読んだという気分させられる。しかし、魅力はその副題にある。時代（とき）の権威（壊血病の研究者でも、壊血病に對峙してきた臨床医でもなく、ほかの分野で功を成した人たちが提出した学説を医学界は認め、世間はそれを広めた。そのたびに、そのすぐ脇にあった真実は霞んでしまい、およそ500年もわたって同じ過ちが繰り返された。淡々と並べられた史実に迫力がある。

1747年、イギリス海軍軍医のジェームズ・リンドが12人の脚気患者を用いて洋上で行った実験を、世界初の臨床試験とする考えがある。リンドは6種類の治療法を比較した。新鮮なオレンジとレモンも含まれ、これだけが著効を示した。しかし、様々な批判を受け、社会から忘れ去られる。「理由を説明できない、経験依存主義だ」という主張が底流にあったようだ。もとより、疫学は理由を示すため

の科学ではない。一方、当時、柑橘類からビタミンCを抽出し、長期保存する技術はなかった。たとえ原因がわかっても解決策はなかったことになる。リンドもこの点は詰め切れていない。

ベタだが教訓を4つ得た。いつの世でも権威の意見は必ずしも正しくはないと、世間は権威の意見に弱いこと、食品の効力と栄養素のそれを単純に同一視してはならないこと、医療は理由（メカニズム）による推論だけでなく、疫学による観察だけでも片手落ちであり、両者とも欠いてはならないこと、である。今、不思議な食事療法や大量の健康食品が巷に溢れている。壊血病は生活習慣病や不定愁訴に姿を変え、今もって我々は同じ歴史を繰り返しているように思えてならない。

## 佐々木 敏

東京大学大学院医学系研究科社会予防疫学分野教授